

御幸町だより

京都御幸町教会
〒604-0933
京都市中京区御幸町通二条下る
山本町434
TEL・FAX (075) 231-3441

『陶工と器の^{ぐう ゆ}寓喩』

牧師 村島 義也

「自分自身を愛するように隣人を愛しなさい」(レビ記19章18節)～主イエスはこれを、旧約聖書の律法における最も大切な教えとして示された。

ところで、この言葉には二つの愛の対象がある事に気づかれるか。「隣人」、そして「自分自身」。「隣人を愛する」ことの自然な前提として「自分自身を愛するように」ということで、「自分自身を愛する」こと。

意外と我々には「他の誰かと」というよりも「自分自身」とうまくいってなくて、そこが憂鬱の生じる場となっている…知らぬ間にそういう状態に陥っているということがあります。自分を愛せない場合(つまり自己を受容できないでいる時、自分と和らげないでいる時)、或いはまた自分の愛し方を間違っている場合～いずれの場合にも我々には他者を受け入れ、愛する事は困難である。

自分とうまくいかなくなる根本的要因は、誰しもが抱えているものと思われる。様々な体験や人の言葉によって心の何処かにインプットされている自己に関する否定的イメージや恐れ、コンプレックス、悔い。こういうものは穏やかな日には澄んだ水の底に静かに沈殿しているが、社会的状況の変化やストレスによって心が揺られると広がって全体を濁す。そういう日には自分と向き合ってもどうにもならないから、造り主である神を仰ごう。

イザヤ45章9、10節。ここに書いてあることは砕いて言えばこういうことだ。陶工は粘土をこねて^{かたど}象り、器に焼き上げる。ところで、こうして生まれたある「器くん」～自分の造り主である陶工に向かって言うことには、「何をしているのか。あなたの作ったものに取手がない」。つまりこれは自分という存在への嘆き。自分は手抜き失敗作品だと思うのだ、「だって、取手がついてないから」。10節、これは何となく分かるだろう…何でこんな自分を生んだのかと・自分は生まれて来なかった方がよかったと、そういう心理。

それにしてもこの器くんには、よっぽど他の「取手つきの器」が立派で素敵に見えたのだろう。彼らを羨んだのだろう。けれど本当は、彼は勝手に品評会を主催して惨めにならなくてもよかったのだ。教えてあげなくてはならない、造り主は完全なお方だ。そして

その業の素晴らしさは、どの作品もこの世に一つつきりしかない、一つとして同じものはないということなのだ。どの一つも、造り主の目には掛け替えのない価値を映している。イザヤ書の別な箇所^に造り主の思いが語られている、「わたしの目にあなたは価高く、貴く、わたしはあなたを愛する」。「誰と比べて」ではない、「わたしの目に価高く、貴い」。「わたしの目に」、そこにこそ誰にとっても本当の生きる価値がある。

悩みの内に「器くん」は「取手がない」と言った。我々も人生におけるこの「取手のなさ」をしばしば心配し、悩む者ではないか。取手の無さ～つまりうまく持って行けない手がかりの無さ、自分という者の意味・価値・喜びの「つかみ所」の無さ。でもこの「器くん」と一緒に神に出会って、是非ともこう思おう。何時も取手はあるのだが、見えないのはそれが見えざる神の御手の内に握られているから。我々の命・人生の価値を日々に取り上げてい給うのは創り主・神であられるから。

心の弱る日～外から自分を眺めると全く粗末、汚れて欠けた土の器。けれど主イエスの福音の下、パウロのように我々もこう言おう、「ところで、わたしたちは、このような宝を土の器に納めています」。宝はイエスの愛と命。神の独り子キリストは十字架の御業をもって我々一人一人に御自身の命の価値を込めて下さっている。またそれは永遠の命だ。器として精一杯、神の愛を、キリストの命と価値を受けとめよう。

造られた器が陶工に向かって何を言うものだろう。陶工には趣向があり、用途への考えがある。主の御声が聞こえて来る、「あなたがたがわたしを選んだのではない。わたしがあなたがたを選んだ」。主が愛を込めて、その命と心を盛るために取り上げられた器である。シンプルに言えば、神はあなたを好んでおられる。この事は神の勝手・神の領分、つまりそれは誰も侵すことの出来ない聖なる事柄、聖なる愛である。

自分を嫌がることは、造り主と争うことだ。主イエスの愛の御手を通して神と和解させて頂こう。そして自分と和らごう。すると、愛が我々の内に命を持ち始める…。